

令和7年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立

小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、6年生を対象として、令和7年4月17日（木）に、「教科（国語、算数、理科）に関する調査」、文部科学省が指定した日（4月18日から4月30日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていたいとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

I. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査（国語、算数、理科）

教科に関する調査（国語、算数、理科）

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

(2) 児童質問調査

児童質問調査

- 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※ 本校の6年生については、単学級ですので個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査（国語、算数、理科）の結果

本年度の結果	国語		算数		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.9	64	8.6	54	9.1	53
全国	9.4	67	9.3	58	9.7	57

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	・図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することについては、正答率が高い。 ・自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容をとらえることや、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題がある。
	よくできた問題	・山田さんが手ぬぐいの模様について言葉と図で説明した理由として適切なものを選択する（2二）
	努力が必要な問題	・【インタビューの様子の一部】で小森さんが傍線部アのように発言した目的として適切なものを選択する（1三（1））
算数	全体的な傾向や特徴など	・示された資料から、必要な情報を選び、数量の関係を式に表し、計算することについては正答率が高い。 ・分数の加法について、共通する単位分数を見いだし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つかを数や言葉を用いて記述することに課題がある。
	よくできた問題	・示された資料から、必要な情報を選び、ピーマン1個とブロックレー4個の重さを求める式と答えを書く（1（4））
	努力が必要な問題	・ $3/4 + 2/3$ について、共通する単位分数と、 $3/4$ と $2/3$ が、共通する単位分数の幾つかになるかを書く（3（2））
理科	全体的な傾向や特徴など	・ヘチマの花のつくりや受粉についての知識が身に付いているかについては、正答率が高い。 ・身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識や、レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見いだし、表現することに課題がある。
	よくできた問題	・ヘチマの花のおしべとめしべについて選び、受粉について書く（3（1））
	努力が必要な問題	・アルミニウム、鉄、銅について、電気を通すか、磁石に引き付けられるか、それぞれの性質に当てはまるものを選ぶ（2（1））

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要

質問調査の結果分析	
・「人が困っているときは、進んで助けていますか」の項目では、肯定的に回答した児童の割合が全国と比べて高い。 ・「人の役に立つ人間になりたいと思うか」の項目では、肯定的に回答した児童の割合が全国と比べて高い。 ・「学校に行くのは楽しいと思うか」の項目では、肯定的に回答した児童の割合が全国と比べて高い。 ・「わからないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできているか」の項目では、肯定的に回答した児童の割合が全国と比べて低い。 ・「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか」の項目では、肯定的に回答した児童の割合が全国と比べて高い。 ・「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方方に気付いたりすることができているか」の項目では、肯定的に回答した児童の割合が全国と比べて高い。 ・「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができているか」の項目では、肯定的に回答した児童の割合が全国と比べて高い。	

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

○「教えたから、子どもが学んだ」ではなく「子どもが学べたから、教えたことになった」という捉えで、日々の学習指導に取り組む。
○「シビックプライドの育成を目指した生活科・総合的な学習の時間の実践一地域の「ひと・もの・こと」と関わり、活用することを通してー」のテーマで校内研究を推進し、研究実践教科等の赤崎スタンダードを確立する。

② 家庭生活習慣等に関する取組

○家庭学習への働きかけ ・学校通信等で家庭学習の重要性を啓発するとともに、家庭学習の時間を10分×学年とし、その時間に取り合う課題を与える。
○全国学力・学習状況調査の結果、及び分析内容の保護者への周知 ・学校通信、学校ホームページ等で発信する。